

英語で表現する力を高める授業の工夫

～「話すこと」と「書くこと」を連動させた授業展開を通して～

宜野湾市立普天間中学校教諭 赤 嶺 美 奈 子

I テーマ設定の理由

21世紀は、「知識基盤社会」の時代であると言われ、グローバル化もますます進み、企業の国外進出や外資系企業の国内進出も激しさを増し、国際競争を加速させている。このような社会背景を受けて、学習指導要領が改訂され、平成24年度より全面実施された。新学習指導要領では、互いの考えや気持ちを英語で伝え合うコミュニケーション能力の育成が重視され、より踏み込んだ能力を目標にしており、学習者に対して英語で表現できる実践的な能力を養うことが求められている。

このような国の方針を踏まえて沖縄の現状を、平成25年度沖縄県学力到達度調査の分析結果から見ると、「現状では、知識・技能の習得に問題があり、運用力に至っては更に課題がある」としており、学習指導要領で期待される、「英語で表現し考えなどを発信する能力」に課題が残っているといえる。

本校においても県同様の課題があるが、平均正答率は4領域とも県平均を上回っており、特に「書くこと」においては県の48.1%に対し61.9%という結果が出ている。それは、平成24年度からの2年間、中頭地区教育課程研究において「思考力・判断力・表現力を育てる指導とその評価方法の工夫改善について」をテーマに据え、「書く力」を向上させるための授業を行ってきたからであると考ええる。主要な取り組みは、授業開始時に本時の目標を生徒と共有し、授業内の振り返りで目標に照らし合わせた英文を作成させるという授業過程の成果の表れだと捉える。本校独自の英語の意識アンケート（5月実施）では、77%の生徒が「英語の授業を好き」と感じており、積極的に授業に参加し、英語で発信しようとする生徒は多い。しかし、県の学力到達度調査の結果では、表現の能力である「話すこと」においては75.2%、「書くこと」では61.9%という結果を出しているものの、英語で自分の気持ちや感情を表したり、自分の考えが伴った表現をさせる場合など、状況にあった英語を表現する力や、既習表現を活用し運用する能力に乏しい面が見られる。

私自身の授業を振り返ってみると、生徒は指定された英文を作る「書く力」は向上したが、特定の文型を使い英文を書かせる指導に偏り、自己表現力の構成要素（田中・田中2003）に欠いた指導を行ってきたと感じた。場面や相手との関係を理解し適切に表現する「社会言語能力」やただ文をつなげただけではなく、話したいことを一貫してまとまりのある文を作成する「談話能力」、そして、伝えたい英語を自分の知識や身振りなどを駆使して相手に伝える能力である「方略能力」の自己表現力を構成するそれらの能力を育てる取り組みに欠けていた。

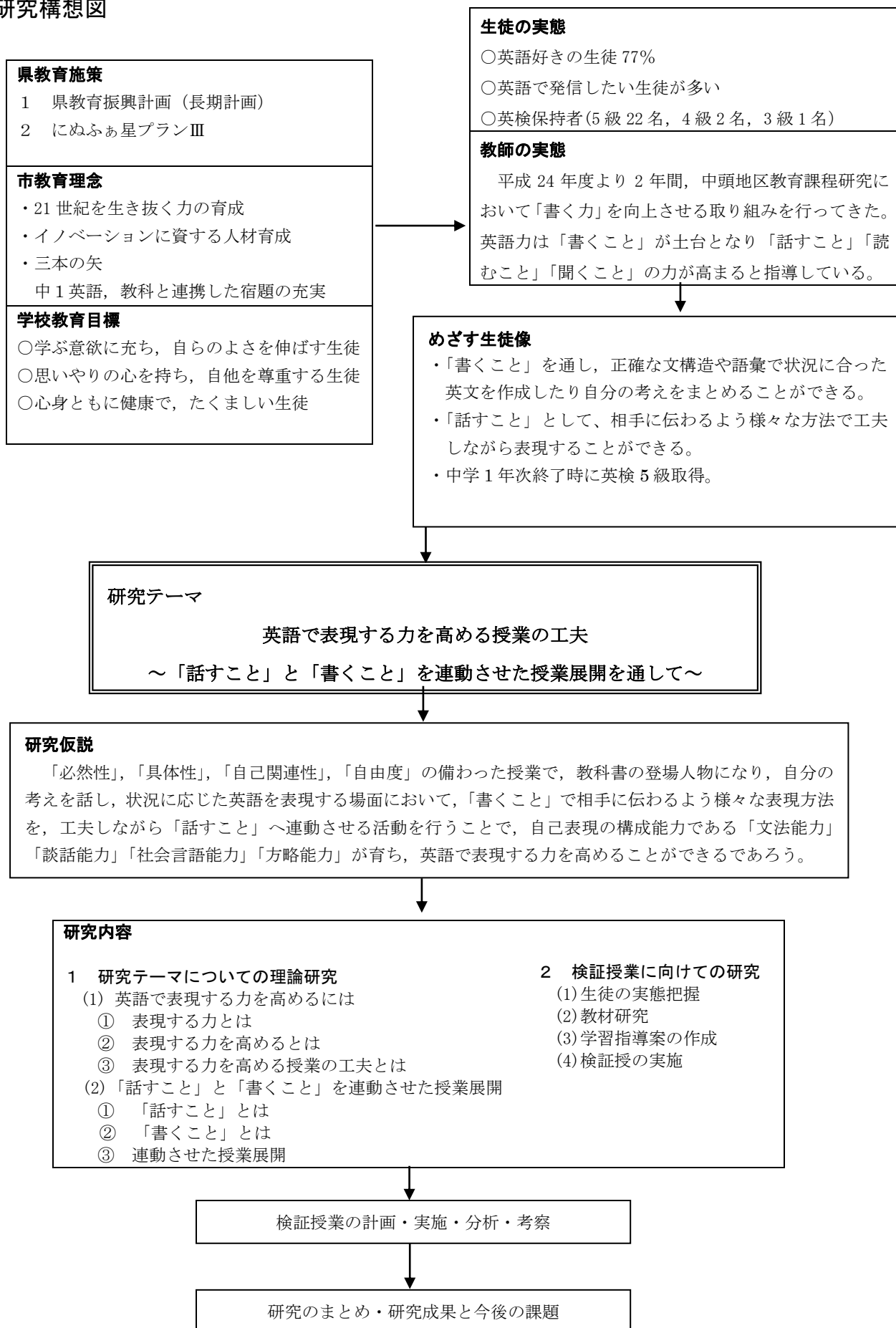
英語で表現する力を高めるためには、自己表現力の構成要素を踏まえ、授業の中に、生徒が自然に表現したい場面をつくりだし（必然性）、活動内容を示し（具体性）、生徒自身に関連のある事柄を扱い（自己関連性）、自由に表現させること（自由性）を「書くこと」から「話すこと」に連動させる授業の工夫を行うことで実践的な能力を伴った英語の活用力がつくのではないだろうか考える。

そこで本研究では、書くことで表現を支える文法や英単語を帯活動で習得させ（文法能力）、複数の文や意味のまとまりのある文を英語で書いて相手に伝わりやすく表現する力（談話能力）を育てる。また、話すことで、場面や相手にあった英語を表現する力（社会言語能力）や、相手に伝わるよう身ぶりやあいづち等の表現方法を工夫しながら柔軟に英語で表現する力（方略能力）を育てる。「話すこと」と「書くこと」を授業の中で連動して指導を行うことにより、英語で表現する力が高まるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

「必然性」、「具体性」、「自己関連性」、「自由度」の備わった授業で、教科書の登場人物になり、自分の考えを話し、状況に応じた英語を表現する場面において、「書くこと」で相手に伝わるような様々な表現方法を、工夫しながら「話すこと」へ連動させる活動を行うことで、自己表現の構成能力である「文法能力」「談話能力」「社会言語能力」「方略能力」が育ち、英語で表現する力を高めることができるであろう。

Ⅲ 研究構想図



IV 研究内容

1 英語で表現する力を高めるには

(1) 表現する力とは

表現の学習領域は「話すこと」と「書くこと」である。中学校学習指導要領解説外国語編（2008）では「身近な場面における出来事や体験したことについて、自分の考えや気持ちを話したり、書いたりする」ことを表現の目標として設定している。表現する力について田中武夫・田中知聡（2003）は「自分の思いや考えを伝えること、自分の知っていることや考えていること、あるいは自分の気持ちを他者に表現すること」と定義している。また、斎藤栄二（2008）は「しっかりとした自己表現力とは土台となる基礎をしっかりとやること」と述べており、英語の基礎となる学力をしっかりつけ、表現する力をつけることが必要だとしている。そして図1のように「話すこと」や「書くこと」の表現する力を支えるものとして語彙力、文構能力が示されている。さらに田中は下表のように自己表現力の構成要素として示しており、これらの4つの構成要素のどれが欠けても豊かな自己表現力は育成できないとしている。

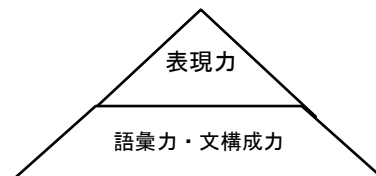


図1 表現力の土台 斎藤（2008）

そこで本研究では、「表現する力とは、自分の考えをまとめ（2．談話能力）、状況に応じて（3．社会言語能力）、相手に伝わるように（1．文法能力）、様々な表現方法を工夫しながら（4．方略能力）、話したり書いたりできる力」と捉え、「表現する力」と定義する。

表1 自己表現力の構成要素

- | | |
|------------|--|
| 1. 文法能力： | 語彙や文法などを駆使して相手に伝えたいことを正確に表現できる力。 |
| 2. 談話能力： | 伝えたいことを一貫してまとめて表現できる力。
* 談話とは複数の文または発話に繋がった意味のまとまり。 |
| 3. 社会言語能力： | 言語の使用場面や相手との関係を理解して適切に表現できる力。 |
| 4. 方略能力： | 行き詰まった時に何とかして表現できる力。（つなぎ言葉や表現の言い換えを駆使す |

(2) 表現する力を高めるとは

中学校学習指導要領解説外国語編には、「『聞くこと』や『読むこと』を通じて得た知識などについて、自らの体験や考えなどと結び付けながら活用し、『話すこと』や『書くこと』を通じて発信することが可能となるよう、4つの技能を総合的に育成する必要がある」と示されており、習得した言語や使いたい英語を活用し自分の考えを伴って表現する力を育てることが重要だと謳っている。その表現する力を高めるには、「生徒が話したい、伝えたい内容があるところに、表現したい気持ちが表れ、その力も高まる。」と田中・田中（2003）は述べている。さらに、自己表現に繋がる英語力を「伝えたい情報をイメージし、自分の知っている語彙を用いて、英語で柔軟に表現（柔軟な表現とは、生徒の伝えたい内容を英語にする場合、的確な英単語が分からなくても、表現を変えて説明することができる力、すなわち方略能力である）する力こそが自己表現のための英語として求められる力」だとしている。

そこで、本研究では「状況に応じた英語の表現ができる社会言語能力を使う場面において、生徒が話したい内容について、英語を活用し表現する文法能力や自分の考えをまとめて表現する談話能力、さらに、柔軟に工夫して表現する方略能力を育てることで、英語で表現する力を高める」ことを目指す。

(3) 表現する力を高める授業の工夫とは

先述したように、生徒に自分のことについて英語で話したい、書きたいと心から思わせるのは、授業の工夫次第であり、その工夫は生徒の言語活用能力、つまり表現する力の向上にも繋がるといえる。しかし、生徒が英語で表現したくても、必要な英語の力が備わっていないと、豊かな自己表現ができなくなる。よって、英語で表現する力の基となる書く力を育てることで話す力も育つものと考ええる。

本研究では、表現の能力である「話すこと」と「書くこと」を連動させた授業の展開がテーマとなっており、授業の中で二つを連動させる活動を取り入れることで、生徒の表現する力を高めさせたい。

田中・田中（2003）は、授業で行われる言語活動を、生徒の表現意欲を高める活動に切り替える工夫を表2のように示している。日々の授業において、生徒が英語を使いたいと思える場面をつくりだす必然性、活動内容を具体的にイメージさせて取り組ませる具体性、自分や身近で関連のある事柄を扱う自己関連性、生徒自身の意思や判断によって自由に表現させる自由度、この4つを意識し、生徒に表現活動をさせることが、生徒の発信したい意欲に繋がり表現する力を高めると考える。本研究においてはこの4つの項目を授業での活動に取り込み研究を進めたい。

表現する力を見取る「評価」において田中・田中（2003）は、「生徒の自己表現力育成のために評価がある」と述べており、表現したことを人から評価され、評価されたことを自分で省みてはじめて、表現内容を良いものにし、表現力をさらに高める」としている。定期テストのみならず、日ごろの授業で自己表現活動を行っている最中や、自己表現で使用したワークシート、毎時間提出する振り返りシートや宿題を評価規準に照らし合わせ評価し、多角的に評価する対象を捉え、評価したことが生徒の意欲にも繋がるようにしていきたい。また、宿題の内容は、沖縄県教育委員会から平成25年に出された「わかる授業 Support Guide」でも謳われているように、授業と連動した課題を毎時間生徒に与え、基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせるようにする。授業の目標の定着度は、提出物や表現活動、ワークシートから生徒の様子を把握し、授業の改善に生かすことができる。さらに、提出物には必要に応じて助言を記入して返却することで、生徒に文法や文構造などの誤りに気付かせることができ、ステップアップした表現に繋がるようになると思う。

表2 言語活動から自己表現活動へ

必然性	生徒が自然に表現したいと思うような場所や状況をつくりだすこと。
具体性	生徒に活動内容を具体的にイメージさせて活動に取り組ませる。
自己関連性	生徒自身のことや身近で関連のある事柄を扱う。
自由度	生徒自身の意思や判断によって自由に表現させる。

2 「話すこと」と「書くこと」を連動させるとは

(1) 「話すこと」とは

中学校学習指導要領解説外国語編では「話すこと」について、「初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする」と目標に掲げ、具体的な言語活動を下表のように示している。

表3 中学校学習指導要領解説外国語編 イ 話すこと

(ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴を捉え、正しく発音すること。
(イ) 自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。
(ウ) 聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりなどすること。
(エ) つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。
(オ) 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること

これらの言語活動を目標に据え、田中・田中(2003)が示す自己表現力の構成要素である、正しい語彙や文法を使い相手に話す力(文法能力)、意味の一貫したつながりを持って話す力(談話能力)、場面や相手に応じた英語を話す力(社会言語能力)、言葉を柔軟に言い換え、身ぶりなどを使ってなんとか自分の考えを話す力(方略能力)を踏まえると、これら4つの能力が「話すこと」を支える能力であり、「話すこと」とは、「状況や場面に応じて自分の考えをまとめ、柔軟に正しい英語で表現すること」と定義する。

(2) 「書くこと」とは

中学校学習指導要領解説外国語編では「書くこと」の目標について、「英語で書くことになれ親し

み、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする」と掲げ、次表の事項について指導することが示されている。聞いたり読んだりした情報について感想や意見を書いたり、自分や周りの状況について既習表現を使い、相手に正しく伝わるように書かせたりする指導が求められている。

大井（2008）は『書くこと』は『考えること』と直結しており、『表現力』とはまさしく『書くこと』にほかならない」と述べている。また、『書くこと』は、自分の考えを産み出し、そしてその考えを表現し、さらにそれを吟味することによって自らの思考を徐々に洗練させていくという高度な認知力の発達を促す行為である。」としている。つまり、自分の考えを文字にしてみることににより、基礎的・基本的事項を踏まえた表現する力の基礎が培われると考える。米山（2008）は「書くことは思考を整理することを意味する。力を定着させるには書くことが大切である」と述べている。

伝えたい、話したい内容を書き表すことで、文の流れや話の展開を考え（談話能力）、自ら辞書を引き、例文を参考にして、文の構造を考えながら（文法能力）、状況に合った英文（社会言語能力）を知識の範囲内で、分かりやすい言葉を選んだり工夫しながら（方略能力）表現することができる。

このように、4つの能力を育てることで、英語を表現する力が高まると考える。また一緒に表現活動をしているペアから書いた英文についてアドバイスをもらうことで、表現に幅を持たせることができ、教師からの文法上の助言をもらうことで正確さを伴う表現になる。

従って、本研究では「書くこと」は表現する力の基本と捉え、「話すこと」の表現活動と連動させた授業の工夫を行うことで表現する力が高まると考える。

表4 中学校学習指導要領解説外国語編 エ 書くこと

- | |
|---|
| <p>(ア) 文字や符号を認識し、語と語の区切りなどに注意して正しく書くこと。</p> <p>(イ) 語と語のつながりなどに注意して、正しく文を書くこと。</p> <p>(ウ) 聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどすること。</p> <p>(エ) 身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと。</p> <p>(オ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。</p> |
|---|

(3) 「話すこと」と「書くこと」を連動させた授業展開

「話すこと」と「書くこと」を連動させた授業のねらいは、「書くこと」で基礎的・基本的な表現を身に付け、それらを使って「話すこと」として自由に表現させることで、英語で表現する力を高めることである。英語を「書くこと」で表現することで、文構造などに注意しながら思考を整理し、自己表現力の構成要素である文法能力や談話能力が身に付く。それを「話すこと」に繋げることで社会言語能力や方略能力が育つ。「話すこと」と「書くこと」の相互学習の過程で、自分の表現の能力の欠落やギャップに気づき、次の「書くこと」さらに「話すこと」へ繋げていくことができると考える。そのように、生徒の表現したいことを英語で書かせ、それを話すことと連動させた活動を繰り返し学習することにより、表現する力が高められるものと考えられる。

斎藤（1996）は英語の力について、『発表すること』と『書いてみること』とは相互に麻縄のごとくからみあって重要な役割を果たしている。特に、深めること、定着を図ること、の2点については書くことを抜きにしては考えられない。深く個々の生徒の心の中に沈んでいく作業は、書くことの受け持つ独壇場である。」と述べている。このことから「書くこと」で英語の力を蓄積し、必要に応じて「話すこと」として出せるよう、二つの能力を連動した授業の展開で英語を活用し表現する力が高まるであろうと考え指導を展開する。

これまでの授業展開では、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」、そして「書くこと」を統合した帯活動を毎時間の授業の前半で行ってきた。そして、本時の目標を提示し、目標達成に向けワークシートによる「書くこと」を行い、指定した英文を使ってのインタビュー活動などで「話すこと」を指導してきた。授業の終わりに、本時の振り返りとして教師が提示した日本語を英文に直し、授業を締めくくるというものであった。しかし、このような授業展開では課題が出た。それは、宜野湾市立教育委員会が実施した平成25年度標準学力調査結果において、「文構造についての正しい理解と運用」の文構造能力、「場面に即して情報を総合し適切に対応する力」を示す応用力と問題解決

能力に課題があることがわかった。つまり、自分の考えを柔軟に自由に表現する力に乏しいわけである。

表5 具体的な授業展開（対話文のある教材使用時）

単元のパート 1 の授業の流れ	1 時間目	2 時間目	3 時間目
帯活動	Reading (Listening) Sheet		
	Word Test		
	Reading & Writing		
目標提示	Today' s Can-Do		
授業内容	新文法導入	本文 Reading	本文 Reading
	本文 Reading	本文の対話文へ参加するための英文作成	発表
	Activity		
まとめ	Today' s 1 文		
宿題配布	本文写本と和訳のプリント		

このような課題も踏まえ、本研究では、具体的な授業を上記のように展開する。帯活動の Reading Sheet（図2）を使った活動を毎回取り組むことで、4技能をバランスよく授業へ取り入れることができ、英文構成を視覚や音読で確認することになり文法能力が育つものとする。単語テストでは、重要単語の習得と正しいスペルの定着に繋がる。本文 Reading を取り入れた Reading & Writing では、読んだ後に聞き取りや、キーワードをもとに英文作成を行う。基本文の文構成をしっかりと把握させることで談話能力や社会言語能力が育ち、その後の会話表現へと繋がっていく。授業内容では、本文の登場人物に実際に生徒が加わり、田中・田中の提唱する4つの能力を駆使して、教科書で話されている内容を広げていくという活動を各パートごとに行う。教科書を使用し、「話すこと」と「書くこと」を連動させた活動をするのである。

田中・田中は（2003）、「教科書の中に盛り込まれている、自己表現活動を、英語授業の活性化のために、積極的に活用していくことが重要である。そのためには、活動への取り組みせ方、自己表現活動の基本、フィードバックのポイントをおさえて、自己表現を取り入れる効果を十分に英語授業に生かせるように」と提唱している。そこで、単語習得や本文 Reading で基本を押さえながら、教科書の会話文に生徒を参加させることで、自己表現を取り入れ授業に取り組ませることで、効果的に文法能力や談話能力、社会言語能力、方略能力を育てることを狙うものとする。また、フィードバックは、授業の帯活動で使用する英作文のワークシート（図2）、毎時間授業の終わりに書かせる英作文（図3）、発表用原稿で書かせる Writing Note（図4）に文法上の間違いがあれば英語の出来栄を褒める言葉と共に訂正し、今後の活動へ生かすよう指導する。

このように、「話すこと」と「読むこと」を連動させた授業展開を行うことで、生徒の英語で表現する力が高まることを検証していく。

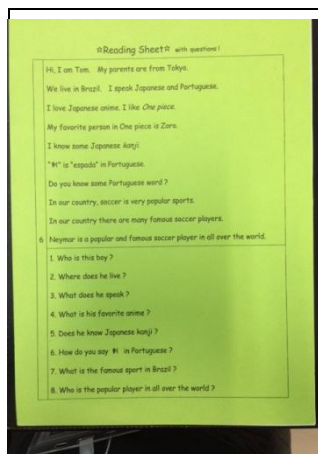


図2

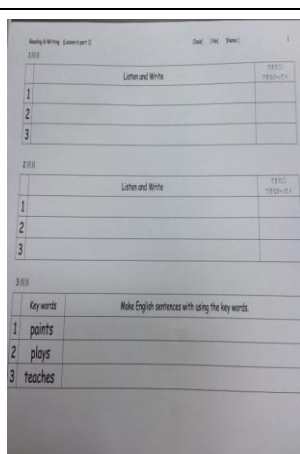


図3

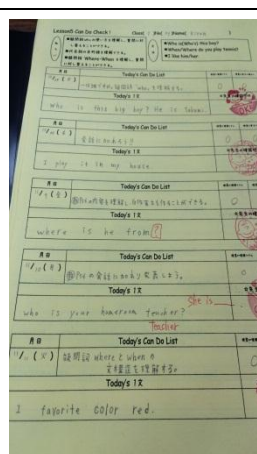


図4

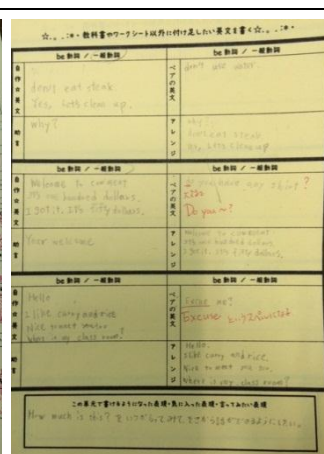


図5

V 検証授業

第1学年 英語科学習指導案

平成 26 年 12 月 10 日 (水) 5 校時
1 年 7 組 男子 19 名 女子 13 名 計 32 名
授 業 者 赤 嶺 美 奈 子
外 部 講 師 大 城 賢
研 修 係 長 知 念 克 治

1 単元名 NEW CROWN 1 Lesson 6 “My Family in the UK”(三省堂)

2 単元の目標

- (1) イギリスについて知り関心を持つ。
- (2) 他人やものを紹介する仕方を学ぶ。
- (3) 三人称単数現在形の理解及び運用能力をつける。

3 評価規準

	a	b		c		d
単 元	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語表現の能力		外国語理解の能力		言語や文化 についての 知識・理解
		話すこと	書くこと	聞くこと	読むこと	
	①	①	②	①		①
L 6	間違えることを恐 れずに積極的に 自分の考えを取 り入れた会話を している。	場面や状況にふさ わしい表現を 3 人 称単数現在形を用 いて話すことがで きる。	3 人称単数現在形 で人の紹介文や場 面や状況にふさわ しい表現を用いて 書くことができる。	場面や状況 に応じて英 語を適切に 聞いて理解 することが できる。	あらすじや 大切な部分 などを読み 取ることが できる。	3 人称単数 現在形に関 する知識を 身につけて いる。

4 単元について

(1) 教材観

本単元では、一般動詞の 3 人称単数現在形が導入される。1 人称、2 人称が主語の際に変化しなかった一般動詞の活用において、3 人称では動詞の語尾が変化することを取り扱う教材である。3 人称単数現在形の平叙文では動詞の語尾に変化が生じるが、疑問文と否定文における動詞の-(e)s の脱落について、“s” が文頭の Does や文中の does not へ移動して、動詞は原型になるというように文構造をしっかりと定着させたい文法事項である。これまで、一般動詞を使った表現は、1 人称、2 人称までと限られてきたが、第三者を紹介する場面において、一般動詞を活用することで、話の幅を広げることができる教材となっている。

また、本単元では英国について取り上げており、英国の正式名称は「グレート・ブリテンおよび北アイルランド連合王国」(The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland) である。グレート・ブリテンはイングランド、スコットランド、ウェールズから成り、これに北アイルランドを加えた 4 つの地域が英国を構成しているということや、独特な楽器についても紹介したい。

(2) 生徒観

① 単元・教材に対する生徒観

生徒が「イギリス」もしくは「英国」と呼んでいる国が、「United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland」という正式名称を持ち、4つの国（country）で成り立っている連合王国であることを、サッカーを題材に英国について学ばせることができる。サッカーワールドカップへUKからは「イングランド」、「スコットランド」、「ウェールズ」、そして「北アイルランド」の4代表が出場している。また、3人称単数を主語にした際の一般動詞の語尾の変化を理解させることで、第三者について話す本単元では、一般動詞を使って様々な人を紹介したり、第三者について伝える力をつけさせたい単元と言えるだろう。また、英国の楽器も紹介しており、普段見たり聞いたりする機会のないアイルランドのイリアン・パイプスやスコットランドのバグパイプ、さらにウェールズのウェルッシュ・ハープという楽器も紹介していきたい。

② 生徒の実態

レディネステスト（図6）は、be動詞と一般動詞を使って自己紹介文を書かせた。3分という時間制限の中で書かせたものであるが、写真が示すように、単文レベルでの自己表現に留まり、前後の文との関連性がなく、文脈にも乏しい。本研究テーマである「英語で表現する力」に弱い面が見られる。

本単元で、一般動詞の3人称単数現在形を習得することにより、自分に関わる第三者について説明したり、彼らがどういった人なのかを、自分に結び付けて表現できるような力をつけさせたい。

Introduce yourself with making English sentences as many as you can (3 minutes)	
1	I am Ren Kishaba.
2	I'm from Okinawa. 大分県
3	I play table tennis. table
4	I have a brother and a sister.
5	
6	

図6

生徒の自己紹介文

Introduce yourself with making English sentences as many as you can (3 minutes)	
1	I am Takami.
2	I play baseball.
3	I like sushi.
4	I have a pen.
5	I don't play soccer. X
6	Soccer.
7	
8	

図6-2

(3) 指導観

本単元では、文法指導で一般動詞の3人称単数現在形が取り扱われている。be動詞の学習においても、3人称単数が主語に来る場合は、1人称や2人称とは違うということを学んだ。一般動詞の場合においても、既習事項を生かしながら、主語が3人称になると、動詞の語尾が変化するということを理解させたい。また、3人称単数現在形の動詞の入った疑問文や否定文の場合には、3単現の文から動詞が原型に戻ることや、疑問詞を使った疑問文の文構成や、返答の仕方も理解させ定着を図りたい。イギリスについて、4つの地域が英国を構成していること、それぞれが違う首都を持ち、言語や歴史も異なる民族であることも含めて、異文化理解の学習も深めたい。

5. 学習指導要領との関連

(1) 4技能の総合的活動

本課、全時の授業において、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」のすべての活動が、組合わされて構成されている。具体的な活動は以下の通りである。

- ① 「聞くこと」…授業導入時の(Teacher Talk, Reading Sheet)の聞き取り、各班の発表を聞き取る。
- ② 「話すこと」…Look & Tell, 教科書の登場人物になり場面に応じた英語を話す。
- ③ 「読むこと」…教科書本文の読み、発表原稿を読む。
- ④ 「書くこと」…家族についての紹介文原稿、インタビュー活動、会話文作成。

(2) 「話すこと」と「書くこと」の連動した活動

本課の一番のねらいは、教科書に出てくる登場人物に生徒自身が加わり、自分なりの会話を挿入して、発表するというものである。これは中学校学習指導要領解説外国語編「2内容」,「イ話すこと」の「(イ)自分の考えや気持ち,事実などを聞き手に正しく伝えること。」(文法能力)と「(エ)つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。」(方略能力)に記述されていることを狙った活動である。また、その活動を支えるために「エ書くこと」の「(エ)身近な場面における出来事や体験したことなどについて,自分の考えや気持ちなどを書くこと。」(談話能力)にしっかりと取り組ませることで「話すこと」に繋げていく。生徒が話したいと思う自己表現活動内容を授業に取り込み英語で表現する力を高めていきたい。

6. 本研究との関連

テーマ： 英語で表現する力を高める授業の工夫
～「話すこと」と「書くこと」を連動させた授業展開を通して～

仮説：「必然性」、「具体性」、「自己関連性」、「自由度」の備わった授業で、教科書の登場人物になり、自分の考えを話し、状況に応じた英語を表現する場面において、「書くこと」で相手に伝わるような様々な表現方法を、工夫しながら「話すこと」へ連動させる活動を行うことで、自己表現の構成能力である「文法能力」「談話能力」「社会言語能力」「方略能力」が育ち、英語で表現する力を高めることができるであろう。

仮説を検証するため、仮説で記述している通り、生徒が表現したい場面作り(表1)の「必然性」、具体的な活動内容を示す「具体性」、生徒自身に関連のある事柄を扱う「自己関連性」、そして、生徒の意思により自由に表現させる「自由度」を授業に盛り込む工夫をした(本時の展開へ記載)。

また、自己表現活動の構成要素(表2)を念頭に、表現活動の「書くこと」において、主に相手に伝えたいことを正確に表現できる力の「文法能力」や話の展開や文章の構成を理解して、自分の考えを伝えることができる力の「談話能力」、言語の使用場面や相手との関係を理解して適切に表現できる力の「社会言語能力」を育てる指導を行う。「話すこと」の場面において、「書くこと」で準備した表現を、自分の知っている知識の範囲内で言い換え、繰り返しやあいづち、身ぶり、手ぶりなどを駆使して、なんとか自分の考えを伝えようとする力を持つことができる力の「方略能力」を持って活動ができるよう指導する。

表1 言語活動から自己表現活動へ 田中・田中(2003)

必然性	生徒が自然に表現したいと思うような場所や状況をつくりだすこと。
具体性	生徒に活動内容を具体的にイメージさせて活動に取り組ませる。
自己関連性	生徒自身のことや身近に関連のある事柄を扱う。
自由度	生徒自身の意思や判断によって自由に表現させる。

表2 自己表現力の構成要素 田中・田中(2003)

文法能力	語彙や文法などを駆使して相手に伝えたいことを正確に表現できる力。
談話能力	伝えたいことを一貫してまとめて表現できる力。 * 談話とは複数の文または発話に繋がった意味のまとまり。
社会言語能力	言語の使用場面や相手との関係を理解して適切に表現できる力。
方略能力	行き詰った時に何とかして表現できる力。 * あいづちやつなぎ言葉、表現の言い換えを駆使する

7. 単元の指導・評価計画(NEW CROWN 1 Lesson 6)

part	時	Today' s Can Do 到達目標	主な 学習内容	表現する力を高める主な場面 「話すこと」と「書くこと」の連動させた展開	a	b	c	d	【評価規準】 評価方法
1	1	3 人称単数現在形の動詞の活用法を理解し使う。	新出文法 新出語句 本文読解	第三者について表現できるように文法を理解しながら書いて表現する。 *具体性				①	行動観察 発表 ワークシート
	2	本文の意味と文の構成を理解しながら読み、参考にしながら家族を紹介する文を作る。	本文読解 英文作成	既習の3 人称単数現在形を活用し、家族についての紹介文を作成する。 *必然性		②	②		行動観察 ワークシート
	3	Show & Tell で家族を紹介する。	言語活動	家族についての紹介文を Show & Tell で表現する。 *自己関連性, 自由度		①	①		発表 ワークシート
2	4	3 人称単数現在形の疑問文と応答, 否定文の文構造を理解し使う。	新出文法 新出語句 本文読解	第三者について尋ねたり, 応えたりできるように文法を理解しながら書いて表現する。 *具体性			②	①	行動観察 発表 ワークシート
	5	教科書の会話へ登場し本文の内容に合う会話を作成する。	英文作成	既習の文法事項や語彙を活用し, 内容にあった会話文を作成する。 *必然性		②			行動観察 ワークシート
	6	本文の会話に参加し場面にあった表現をする 《本時》	言語活動	本文に合う会話文を作成し, 工夫しながら発表する。 *自由度 *必然性	①	①	①		発表 ワークシート
3	7	疑問詞と3 人称単数現在形の疑問文と応答の文構造を理解し使う。	新出文法 新出語句 本文読解	疑問詞を用いて第三者について尋ねたり, 応えたりできるように文法を理解しながら書いて表現する。 *具体性			②	①	行動観察 発表 ワークシート
	8	教科書の会話へ登場し本文の内容に合う会話を作成する。	英文作成	既習の文法事項や語彙を活用し, 内容にあった会話文を作成する。 *必然性		②			行動観察 ワークシート
	9	本文の会話に参入し場面にあった表現をする	言語活動	本文に合う会話文を作成し, つなぎ言葉なども入れながら発表する。 *自由度	①	①	①		発表 ワークシート
USE	10	Mini-project 友達の紹介をしよう	言語活動	既習の文法事項や語彙を活用し, 旧友を紹介する文を作成し発表する。人の発表を聞く。			①		発表 ワークシート
We' re Talking	11	何かをする時刻を尋ねる・説明する	言語活動	既習した文法事項や語彙を活用し, 内容にあった会話文を作成し本文に加わり発表する。	①				
テスト	12	単元テスト				○	○	○	テスト

8. 本時の指導「本文の会話に加わり, 場面にあった表現をする」(6/12 時間)

(1) ねらい

新出事項である3 人称単数現在形の英文や既習事項を活用し, 場面(必然性)にあった内容となるように工夫して, 生徒自身の意思や判断にもとづいて, 自由な表現(自由度)で豊かに発表ができる。

(2) 本時の評価 <外国語表現の能力（話すこと）>

場面や状況にふさわしい表現を、3人称単数現在形を用いて第三者について話したり聞いたりすることができる。また、(発展)発表される英語を聞いて適切に理解し、今後使いたい表現や参考になる表現はワークシートへ書き取ることができる。【評価方法：発表内容とワークシート】

(3) 本時の授業仮説

教科書の登場人物になり、必然性、具体性、自己関連性、自由度を示し、自分の考えや状況に応じた英語を表現する場面において、「書くこと」で、相手に伝わるよう様々な表現方法を工夫しながら表した後、「話すこと」へ連動させる活動を行うことで、自己表現の構成能力である、「文法能力」、「談話能力」、「社会言語能力」、「方略能力」が育ち、英語で表現する力を高めることができるであろう。

(4) 本時の展開

研究テーマ： 英語で表現する力を高める授業の工夫 ～「話すこと」と「書くこと」を連動させた授業展開を通して～				本研究との関連した活動 (田中・田中 2003)							
ねらい：新出事項である3人称単数現在形の英文や既習事項を活用し、場面（必然性）にあった内容となるように、生徒自身の意思や判断にもとづいて、自由な表現（自由度）で豊かに発表ができる。				言語活動の工夫		自己表現力の構成要素					
時間	指導過程	生徒の学習活動	教師の指示及び指導上の留意点 ★評価【評価方法】	必然	具体	自関	自由	文法	談話	社会言語	方略
【導入】											
1分	1. Greeting	・ 始業のあいさつは3秒礼(語先後礼)。	・ あいさつで始業のけじめをつけさせる。								
3分	2. Teacher Talk	・ 教師の話を聞きその後の質問に答える。	・ 教科書内容と関連付けながら、生徒の興味を引き付けるようにTeacher Talkを行う。								
1分	3. Date/Day/Weather	・ 日付などを英語で答える。	* 英語授業の雰囲気作り。								
【帯活動】											
3分	1. Word Test	・ 2分以内で解く。採点後提出。	○・パート2最終回のテスト。 * 新出語句の定着。					○			
5分	2. Reading & Writing (Make sentences with target words.)	・ 1分音読×2回目標の7まで読む。 ・ 1分で指定単語を使って英作文する。	・ 音読ができない生徒への配慮。 ・ 英作文は指定された単語を使う。 【ワークシートの英作文】提出		○		○	○			
【展開】											
2分	1. Today's Can Do 「教科書の会話へ参加し、本文の内容に合わせ工夫しながら表現する。また、人の発表を聞いて、良い表現は聞き取り	・ 目標確認する。 ・ 所定の用紙(Can Do check)へ記入する。	・ 目標を意識させる。 ・ 所定の用紙へ記入しているか。		○						

時間	指導過程	生徒の学習活動	教師の指示及び指導上の留意点 ★評価【評価方法】	必然	具体	自関	自由	文法	談話	社言	方略
	【展開】										
3分	writing note へ記入する。」 2. 本文 Reading	- 教師の後に続いて発音に気をつけて読む。 - 内容についての概要を答える。	- 黒板に本文掲示。 - 内容について質問する。					○			
30分	3. 発表	前時で用意した表現シートをもとに教科書の会話に加わり自作英文を表現する。	【「書くこと」と連動した「話すこと」の言語活動】 *表現シート（終了後提出）	○	○	○	○	○	○	○	○
	まとめ										
1分	1. Today's 1文 「みなこ先生は～しますか？いいえ、しません。」	3人称を主語にした三単現の疑問文と応答文を表現する。 Can Do check シートへ記入し提出。	- 出題内容を把握できない生徒のためにヒントを示す。 - 解答は教師が示す。(提出) - 提出物は授業終了後と伝える。		○		○	○			
1分	2. 宿題 ワークブック 3. 次回予告	宿題を確認する。	- 次回チェックする。 - 教科書 70 ページ USE Mini-project 紹介する友達を決めておくようにつたえる。								

(5) 評価【評価方法：発表内容とワークシート】

積極的に会話に参加し場面にあった内容を、表現方法を工夫しながら、3人称単数現在形を使い、聞いたり話したりすることができる。また友人の発表の中からよい表現を聞き取りワークシートに記入することができる。(発展)



平成 26 年度第 2 回英検合格者

(27 名受検／学級在籍 32 名)

5 級 22 名

4 級 1 名

(他英検保持者 3 級 1 名, 4 級 1 名)

VI 仮説の検証

研究テーマ

英語で表現する力を高める授業の工夫 ～「話すこと」と「書くこと」を連動させた授業展開を通して～

仮説：必然性、具体性、自己関連性、自由度*（下表参照）の備わった授業で、教科書の登場人物になり、自分の考えを話したり、状況に応じた英語を表現する場面において、「書くこと」で、伝わるような様々な表現方法を、工夫しながら「話すこと」へ連動させる活動を行うことで、自己表現の構成要素である「文法能力」「談話能力」「社会言語能力」「方略能力」*（下表参照）が育ち、英語で表現する力を高めることができるであろう。

本研究では、テーマを「英語で表現する力を高める授業の工夫」として、「話すこと」と「書くこと」を連動させた授業を展開してきた。授業は、田中・田中の「自己表現活動」と「自己表現力の構成要素」を取り入れ、仮説に基づいて研究を行ってきた。（下表参照）授業実践、生徒観察、ワークシート、事前事後検証用自己紹介文、アンケート調査結果から、英語で表現する力が高まったのかを検証する。

表 1 言語活動から自己表現活動へ 田中・田中(2003)

必然性	生徒が自然に表現したいと思うような場所や状況をつくりだすこと。
具体性	生徒に活動内容を具体的にイメージさせて活動に取り組ませる。
自己関連性	生徒自身のことや身近に関連のある事柄を扱う。
自由度	生徒自身の意思や判断によって自由に表現させる。

表 2 自己表現力の構成要素 田中・田中(2003)

文法能力	語彙や文法などを駆使して相手に伝えたいことを正確に表現できる力。
談話能力	伝えたいことを一貫してまとめて表現できる力。 * 談話とは複数の文または発話に繋がった意味のまとまり。
社会言語能力	言語の使用場面や相手との関係を理解して適切に表現できる力。
方略能力	行き詰った時に何とかして表現できる力。 * あいづちやつなぎ言葉、表現の言い換えを駆使する



必然性、具体性、自己関連性、自由度の備わった授業

1 必然性、具体性、自己関連性、自由度の備わった授業の検証

3～4人構成のグループが、教科書の会話文へ参加し、登場人物に加え生徒自身が教科書の会話に加わることで、必然性のある授業となっている。教師が新たに教材を作ってから表現活動ではなく、教科書を活用することで、各パートの英語による自作英文を用いた表現活動が可能となる。

生徒のアンケート結果からは、「英語の授業が好きか」という質問に、5月では77%の生徒が、12月では90%の生徒が好きと肯定的に現授業を捉えていることで、「必然性」を授業に作りだすことで生徒の英語学習への意識の向上と表現意欲の向上が見られると言える。

教科書に登場してくる人物に加わることで、グループ内で誰が誰を演じるのか、加わる人は誰なのかを話し合う。また、話の展開によって教科書内容も変わってくる事を確認する。このように取り組む内容に、「具体性」を示すことで生徒の発表に対する役割が明確化され、会話文も作りやすくなる。アンケート結果からも「担当する登場人物になりきって会話をする」と楽しい」と生徒の意見も出ている。「具体性」を示す授業の工夫をすることで生徒の意欲も向上したと言える。

単に教科書内容の話に留まらず、登場人物に生徒の興味があることを聞いたり、生徒の関心がある事柄を表現活動の中に持たせたりして、話の内容を広げるよう指導した。また、会話を聞く場合、どのような表情やあいづちを使って相手の話を聞くのかも考慮しながら表現することで「自己関連性」を持たせる指導を行った。しかし、アンケート結果からは、教科書内容に沿って自分の好きな話を展開したり気持ちに合ったジェスチャーを使ったりすることができた生徒は 52%にとどまっている。一方、情意面から「英語での質問に自分なりの答え方ができた」や「英語で自分の好きな方に話を広げることができる」と答える生徒もあり、「自己関連性」に繋げることで英語表現への意欲を高め、自己表現力が向上したと捉える生徒もいた。

グループ内での役割、教科書の会話に加える内容、辞書から新しい表現を見つけ出し会話文に加えるなど、生徒の自由な発想を大いに取り入れた「自由度」のある表現活動を授業で行ってきた。難しい英語を既習事項に置き換えることなどの留意点は最小限に留め、英語で自由に表現する活動を授業に取り組み、教科書の会話を生徒の意思により話を展開させる指導を行った。英語表現の得意でない生徒に対しては、ジェスチャーやあいづちなどを使い、自由に表現させ会話に参加させることで、生徒の 84%が「教科書の人物として登場した表現活動が楽しい」と答えている。

このように、必然性、具体性、自己関連性、自由度の備わった自己表現活動を取り入れた授業を行うことで、生徒の英語への意識は次のアンケート結果（表 3）のようになった。

表 3

		7 月に実施	1 2 月に実施	
英語は好きですか。	はい	7 7 %	9 0 %	+ 1 3 %
	いいえ	6 %	3 %	－ 3 %
	どちらでもない	1 6 %	6 %	－ 1 0 %

表 4

教科書の会話文へ参加することで、英語の力が付いたと思いますか。	はい	7 7 %
	いいえ	6 %
	どちらでもない	1 6 %

また、自作の英会話を教科書内容に合わせて展開する授業を、生徒は表 4 のようにとらえている。生徒のアンケート結果を踏まえ、「必然性」「具体性」「自己関連性」「自由度」の備わった授業が、生徒の情意面においても表現する力が高まると言える。

2 「話すこと」と「書くこと」を連動させた授業展開の検証

「文法能力」、「談話能力」、「社会言語能力」、そして「方略能力」を育てることが、英語で表現する力を高めるであろう、「書くこと」で会話文を用意し、教科書の会話に参加し、「話すこと」として表現する授業展開が、どのような英語の力をつけたのかという質問に対し、生徒は感想を表 5 のように述べている。

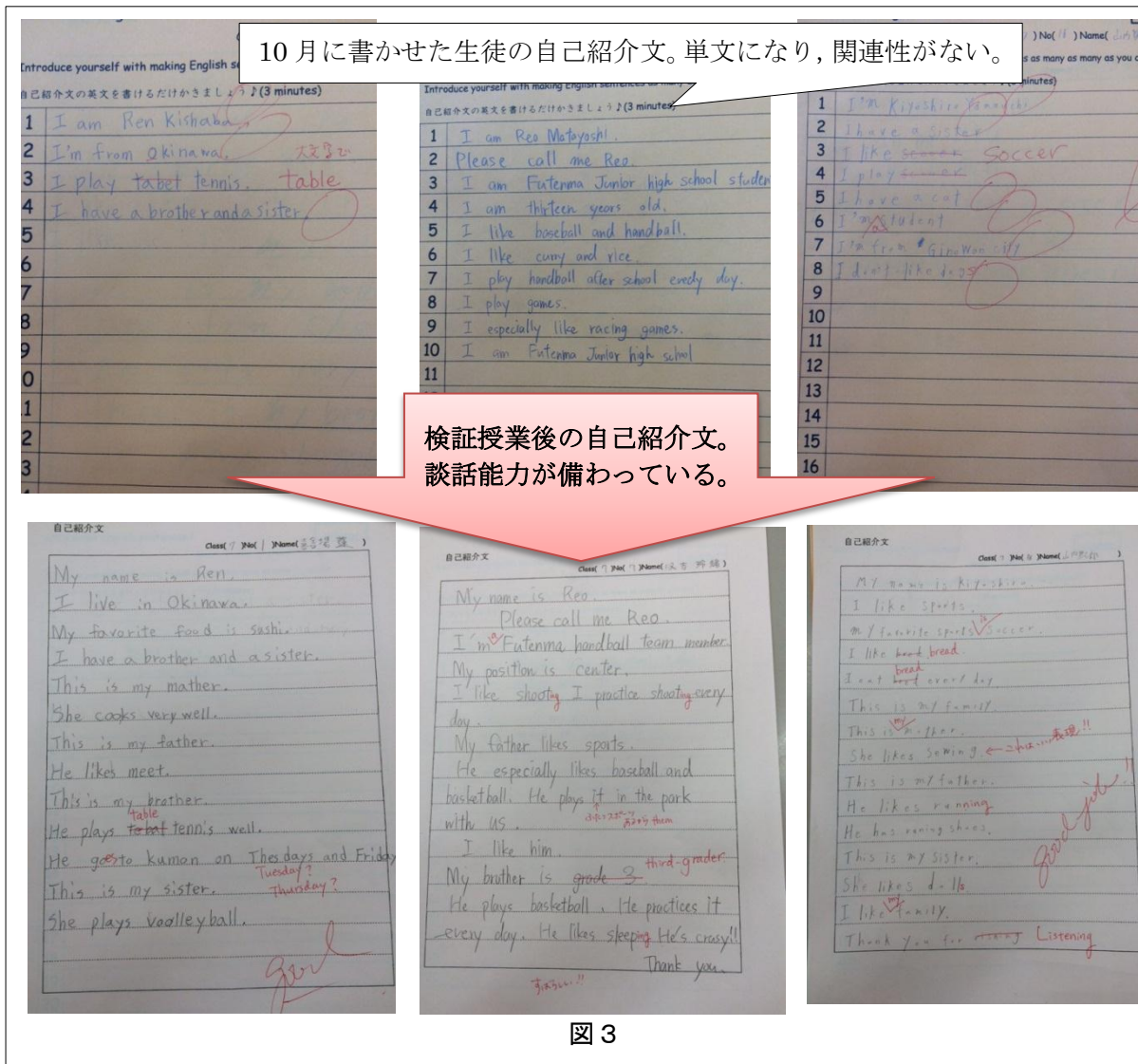
表 5

どんな英語の力が付いたと思いますか。 ・ どうすれば相手に自分の考えが伝わるのか英語で工夫して話すようになった。(方略能力) ・ 教科書に出ない単語で会話を作る。(文法能力) ・ 英作文ができるようになった。(文法能力) ・ 英語での質問に自分なりの答え方ができる。(談話能力) ・ 英語を使って先生や外国人と話すことができる。

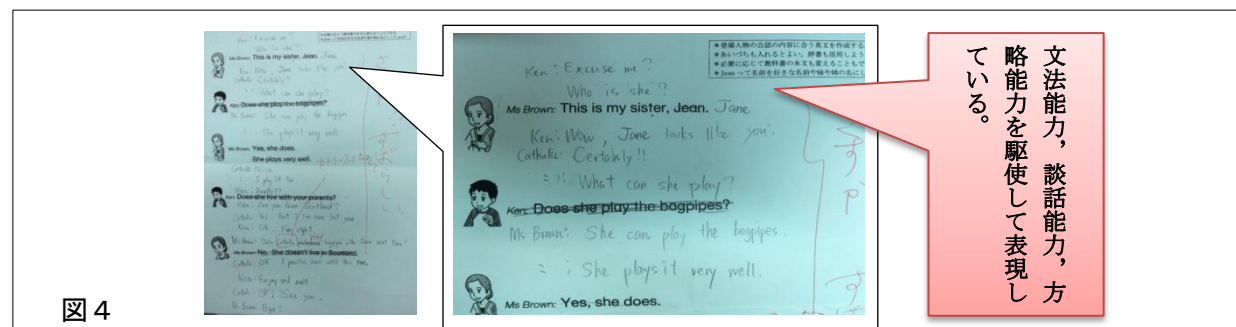
仮説を検証するため、授業では自己表現活動の構成要素を念頭に、表現活動の「書くこと」において、主に相手に伝えたいことを正確に表現できる力の「文法能力」や話の展開や文章の構成を理解して、自分の考えを伝えることができる力の「談話能力」、言語の使用場面や相手との関係を理解して適切に表現できる力の「社会言語能力」を育てる指導を行った。「話すこと」の場面において「書くこ

と」で準備した表現を、自分の知っている知識の範囲内で言い換えや繰り返し、あいづち、身ぶり、手ぶりなどを駆使して、なんとか自分の考えを伝えようとする力がある「方略能力」を持って活動ができるよう指導してきた結果、生徒の情意面において英語で表現する力が育ったと答える生徒が多くいた。

記述による生徒の変容は、研究前と検証授業後の生徒が書いた自己紹介文で検証する。研究前に実施した自己紹介文では、生徒は文脈のない単文を書いて自分の紹介をしている。しかし、検証授業後の自己紹介文では、意味のまとまりのある複数の文で表現できており、談話能力が高まったと言える。



また、教科書内容に生徒が登場して会話をするという展開を繰り返し行うことで、生徒は英文作成に慣れ、辞書を活用し、表現能力の1つである「文法能力」が育っている。下の生徒のワークシートからもそのことが伺える。



辞書を活用して未習の単語を調べるなど、既習事項を駆使して表現しており、文法能力が育っていると言える。また、あいづちを入れたり身振りを入れたりして、会話の潤滑油となるよう工夫する面も見られた。教科書の内容にうまくからんで話を展開できていることから「談話能力」が育っていると判断できる。

3 検証授業

検証授業では3～4名の生徒がグループになり、New Crown English Course 1 Lesson 6 Part 2の教科書本文の登場人物となって参加する表現活動を行った。事前に生徒は、「書くこと」で相手に伝えるような様々な表現方法を工夫しながら準備した表現を、自分の知っている知識を駆使して言い換えたりあいづちを使ったりジェスチャーを入れたりして「話すこと」の場面において表現活動を行った。



図 5

発表を行う際に生徒は書いてある原稿に、身ぶりなどを加えて表現した。書いている原稿を用意することで発表への自信と安心が得られていることがアンケート結果（表6）からも見てとれる。また、この授業法では生徒の達成感や充実感は次の（表7）ようになった。

表 6

発表に自信を持たせたものは何ですか。	普段の授業で練習した英語の表現	61%
	発表用に書いて用意した紙	39%
	とくにない	0%

表 7

英語を書く力が付いたと思いますか。	はい	94%
	いいえ	0%
	どちらでもない	6%
英語を話す力が付いたと思いますか。	はい	84%
	いいえ	0%
	どちらでもない	16%
書く作業は話すときに役立ちますか。	はい	97%
	いいえ	0%
	どちらでもない	3%



4 検証のまとめ

田中武夫・田中知聡（2003）の「自己表現意欲を高める言語活動の工夫」で表現意欲を高める活動の特徴をとらえ、「自己表現力の構成要素」の育成が豊かな自己表現力を育てるという考え方を参考にし、従来の授業にこれらの内容を盛り込むことで、検証で述べたような生徒の変容が見られた。検証結果から総合的に、教科書を題材に「話すこと」と「書くこと」を連動させながら、生徒を本文の中の会話に参加させることで、生徒の意欲面も英語力も向上させることができたと言える。今後も更に授業の工夫改善を行い、生徒の英語で表現する力を高めていきたい。

VII 研究の成果と課題

1 研究の成果

- ・「必然性」、「具体性」、「自己関連性」、「自由度授業」の備わった授業の工夫をすることで、生徒が主体的かつ意欲的に英文作成に取り組むことで生徒の英語による表現力を高めることができた。
- ・生徒の意識調査の結果や検証用の自己紹介文からも分かるように、自分で考えた英文が教科書の会話文と連動し表現することで辞書や既習表現も活用することで「文法能力」がついた。
- ・教科書の登場人物になりきって、文脈を考えながら英文作成ができるようになったと答える生徒は94%おり、「談話能力」が育ったと言える。
- ・あいづちやジェスチャーなどを使い、相手に分かりやすい英語を使ったり話の流れを考えて表現できるようになったりした生徒が90%おり、「方略能力」が高まったと言える。
- ・「書くこと」と「話すこと」を授業の中で連動して指導することにより、話す際の原動力に繋がり生徒は自信を持って話すこととして表現できた。

2 今後の課題

- ・宿題の内容が生徒の表現力を向上させるのか見取することはできなかった。宿題として生徒が取り組んできたことを、授業の中で活用できる場面があると授業に真摯に向き合い、生徒たちの宿題へ取り組む率も上がるのではないかと感じる。
- ・授業では教師をMs. をつけずに指導した。「コミュニケーションでは、表現する相手が誰であるのか、どのような場面で表現しようとしているのかを理解した上で、表現内容を適切に伝えることができる」ことが求められていると、田中・田中(2003)は述べている。1年生のこの段階ではMay I ~?やCould you ~?などの敬語は未習だが、Please を使うことで、丁寧な言葉遣いになる点や、目上の人に対してMr. Ms. を使って呼ぶよう指導していきたい。
- ・授業のまとめのToday's1文を教師が指定した英文作成ではなく、「話すこと」と「書くこと」の連動した授業展開から、本時の重要事項を活用しペアで対話文を作成し、発表という形で表現させることで、英語で表現する力が向上するのではないだろうか考える。

<参考文献>

- 沖縄県教育委員会 2013 『わかる授業 Support Guide』
- 田中武夫・田中知聡 2003 『自己表現活動を取り入れた英語授業』
- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 外国語編』
- 文部科学省国立教育政策研究所 教育課程研究センター 2011 『評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料(中学校 外国語)』
- 大井恭子・田畑光義・松井孝志 2008 『パラグラフ・ライティング指導入門 中高での効果的なライティング指導のために』
- 淡路佳昌 2010 『英語教育 6月号 導入期からのライティング指導の展開』
- 斎藤栄二 2008 『自己表現力をつける英語の授業 How to Let Students Express Their Ideas』
- 斎藤栄二 1996 『英語授業 レベルアップの基礎』
- 米山達郎 2002 『英語で書く力が面白いほど身につく本』

<参考URL>

- 沖縄県教育委員会 2013 『平成 25 年度 学習到達度調査結果』
<http://www.pref.okinawa.jp/edu/gimu/jujitsu/data/documents/25okinawakengakuryokutoutatutodotyousakekk a.pdf>
- 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 『小・中学校教育課程実施状況』
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h15/H15/03001051030007004.pdf
- 文部科学省 『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告(概要)～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352463.htm